

香虎

之書

部

冊

滋賀縣立藍所中學校

冊  
號

竹  
武根

上

1371  
vol 1

說法大師

卷之三

秋山大武根序  
とくはる天代下代  
けゆれりやもよし

れと虫鳴きの音と

川音の方は聞けざる

う音をかゆしがすれ

音をにもうれぬる心地

めまし人をすとよ

竹立の煙をもまへ下

と火のまともとあらゆ

風刀雨あらわれのめ

たるは松の和風

里風かわらの和風に

すこ客出のいふと城  
情のりをとむも居

佐原の東山の松

ひそかにまきあらめ

さくらのわいりのまく

あるまくはぬる金毛も

拾ひて見ゆる道

かまくあられの森林

作人とひ桃し會

長野ちくわの宿をすら

お葉のむらの風を

お鳴りし雲のをくらむ

由う火薙とて秋たむきを

ひれまく今す風からふ

まもゆきひよふ地すこり

ゆゑのくぬれお丹神等

ゆれとおゆめ思ひすらす

ゆもやうとせんぐす

うぬをともだのうさぎあ

ゆ一とあおぞらはるしきの

えぬゆきいぢらきねまほ

ゆきとすみゆきとすみゆき

わ  
か

ム化二年五月

奇風里も爲

ちつち

歌乃大も称れと一書

今も主之を候やこのもれさへ一書  
六十載れ川乃なれり。よしよしよ  
いくすう代経ぬすまゆる財ありや  
うちく、那よ先よふきてハチ波の  
立、う角りて今やこのもれ花乃され  
景の邊す。ゆふるを拂代のひうりと

嘆ましとつばのよすかをうづくぬ侍よ  
あらほひよなむ有けるものへうれし流の  
をもよやうへやうへりぬ  
さやふねたうりよぬをもうふよ  
うれすよたう人のくろと経て  
さうひえふとあれりすきは實とり  
まも言葉のあやなる事云はと歌ふれ

あちめ成るは奥ひ乃多アミサのゆ  
にゆよま、ゆよ月をされよもり浮努力  
の海溝を清よみひうふうある海士乃  
きく魂くわく角け涌あくえよも  
きよりもの、一靈すよ神のよまと  
うげくくるえよもくはうすくじよせ  
あきハツルきりよもくはれすよよきよ

さう波にれた川のきりをひよみの久  
くちひもれると橋りきはふ乃  
今かくもちよつるハ夏耶ゆゑそ  
のねけ流しもろこりへ思ひほ  
いやたゞ下をめぐら久くは月夜と  
えくもくみやいとすてものうきくせ  
やるもくひのやうよむ黒ひくんがおの

尼まよあすねつまよれいと  
きくひるよそりうけるとよよくに時  
やうあうてよみよみのながよよく  
えふのゆきよほよても情をふうく  
洞うるはくやひふよすよよきあれ  
さぬ日うちそのおおアニモウリ

あすすととよとよとよとよとよ  
うほきくさ度牒うせきこうりゆ  
かの川乃渕漱とふくわくうばの  
立うて水底をえりひろはよて  
いざりよかくよもな化のこせとよ  
まの水月十日、りす四日の日壇内度牒

うほくとせ人のあれと感へばつ風  
実のうるわしきぬ風をなしけど、  
やくらる翁といれよきよきよきよき  
はくまくのいきくとくよきほりく  
そむくられゆいのいよいまと

歌迺大意上卷

長野義言著

堀内廣城校

そらの書

物を人情とあらわし言語の文たり。よしとされ方ありて。さ  
人處コトハドあるまことりで。説ナリとも。言語の文よりて。事の事と自、  
足コトハり。わざとるがたきり。さて。この事ふへり。すゞしへ。ふ  
んはく者なる。あらう。もし。きこめども。その大意と。うぐか。だ  
て。初耳びの。むずからぬ。さき。行。その的と。定め。よし。ちく。重。  
き。うち。わづか。自。手。行。い。ゆ。と。え。く。そ。の。す。く。もの。の。圓。の。て  
て。ひづれ。の。そ。く。と。と。の。的。の。く。が。一。走。す。い。も。み。く。轟。ど  
と。目。と。経。ま。よ。ひ。1。そ。の。テ。あ。う。が。如。一。若。今。の。世。の。キ。人。ま。

。手の不とも「きよめ」とと辨知す。唯三十一年、  
「わきばあざテモテモハ。」で自ら行を身に纏ひ、  
とあることある。是はゆるてわもひと旅のしらぎとみ  
えんがう。と見えまことにさうじや

筆を以て書かばひのむじよへあらひゆきも實はざりや。ま  
きはうきき方よしはあひもとんぞうれまくつひそ  
そる難いれどもくづきをとどひめひよのあさ  
ゆき。又酒のあつひすねとぶよのくふ萬人を云  
ひ。ひ御へ。うとうとくよのうとおもとつまき。まくよ  
りて。もくさんと井の水を引くべから。とくとくすへまの

まううし。まくらひめうばと。二十まうすつを  
を。自ううき情ううりのねま。初人のねうはうこ  
せうんうひせうてうう情とえううするうもれあくて有う  
むがうて人者ううとくも云せうう調ううじ。まう  
うて身ううひうう情とえううとく。或人の度う持ううう  
のものぬうと今うう。コノヤウニタクサクラヲ植テヘルノケシ  
キハコ、ニアリ。とひくまうども。さくされふをうがやう  
ふれぬとさくられてもスケレ。かくもせねうす  
ア。まうあきの辰月とる。ヨヒノ月ノサヤカナルコトヨ。雪ト  
イフモノハスコレモナイ。とほん見ゆ。ヨヤうすううの三月

ヨリヨリ又夏の日青草とよし風の涼  
ア高寺の情うりヨリあらわり竹とて風も竹あらわ  
涼りりり。つてテアリテテアリテアリ竹立りの涼りり。  
又秋の山の紅葉とそで竹をねとテすとすの情うるぎとて  
籜まで出でそりしらぬきしをみりき極きわくまくまく。  
とつて鳥テアリテテアリテアリ竹をねとてアリテアリ竹  
庭の竹とぞりしらぬきしを庭アリテ自とわくと  
アレとりぐく御りうれしきを庭アリテ自とわくと  
夫人をうれしくつてテユカリく。しむ何夏つまでもうくと  
そきそき三十までひつたむよしむ。テアリギヤバニシ

じよどくもひりへりまほそひくも情ひみて。キヨ常の信言  
シテモおとづきへざれを事へひと證てよしも。もうアバ月を  
貯すあらまくテラ、情と覗て。どとふたまえうをすく拂ひ。アキ  
テヒテテアリとアリテホコトアフヒ初のアリ。泥じく。オホ  
アキの情をうしうありがま。アキアリカクアリ。アキアリ  
アキアリ。雅ひの相うり。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。  
アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。  
アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。  
アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。アキアリ。

まこと、うつしきてとらじて大き方へすいと夏へきて  
ありうとうふよあつてあきよへべか如何りも

ありまし

まこと、守へる語の處より事の傍もよされどよきわは  
す語のうそて分べきはやうどすに付く。酒ヤハラフわす後ろん  
人とさへ化と感ドあれとすづくいとくとてあくまよし  
テのまづよみあわうどりゆくわんじんすむと俗、つてばりや  
酒ともとも限られし衰と人のきく夏うきとすがなる物きくわ  
つて情すく酒ヤハラフあやましよしよまほへと感ドりで共  
ひまどく酒ヤハラフめくらしよきまほを人情のまことかくわ

とお風ヤハラフれぞうばの文あくまきのうちりてすくとく一六  
ちひきれぞ先他まで刀ひてを更ある。がくゆの氣ヒトツがれとて酒  
物モノとくとを自く衣と感ざべき處あくまほ。考りけり火ハ活用ふ  
れを大ぐと光他とよ及せば。酒も人情くまでハわくま  
情きくて意化とく及ぶ

後世人すく間よ差別ヤキノりと海辨シタマサ故よすゑくみな  
つれんくとくとくもよきよのをよむほりあつた。あくまほ  
そくまよつとよつと海シタマサハシタマサきひだく。然詞と書  
いて又々時ハタチ古字ハタチハ太く仍ハタチて取所ハタチすばんと移  
てハ少代萬代も、からだと云。物とすとてハ胸ハタチの

ごくひすへ袖うりあはせば海川よまよてよまよひ事  
をあぐとあぐと。或人祝と哀傷とるはれのよまよ。  
謂はれてすのよばかきがた。人情のすきハ胸よハ云  
うと云とあふ。まの情と人よかしもハテヨ。アレをうそ  
限う相りて詫うき情と他人よアキモシレ。アラヒミ理  
歎えス抱もづきわざとアキモシレ。時袖の洞と  
海川よたよす海川よま。阿リトヨハナリ。アレにし  
じ。さやと海川よま。アリモウラジツの事モウタスル。俗の諺  
ト父のちづへ山ちづと。母の事とめうと。海くニテ空の  
風情よよく協つ。是より海山のどくと云て浪うてつ。

いと。まちりと。す。す。す。す。す。す。す。す。す。

ぞき地

古今事の序よま。人のつとまひして萬のうの葉をかよる  
今。世同<sup>ヨク</sup>うる人夏葉をきよのそれ。アラフとアラム。アラム  
アケテアヒヨセアラム。アヒヨセアラム。アヒヨセアラム。  
アヒヨセアラム。アヒヨセアラム。

みやえ大人の序よま。テと言葉の差別ある。夏と冬。秋  
春。御すと人のうと種して。まつて何夏とも。も。も。情の実取  
り。すよすよて。よ。よ。き夏す。惜。本詞。未。よ。よ  
れ。本の詞。よ。て。ちの情と。考。考。すよ。つ。よ。きよ。と。ぬ

さりごみまでとつて辭をもひてすへるの哀情とをもて。その恨  
き情とまじむむ地うんじ。祠にてかく東とよひて哀情をがく

庵き理うら夏とまじく。嵯峨天皇承和七年二月參議小  
野望。源氏の御お流されし時より船とあてもあらりて京うち人の  
つまゆうづくら。松田のもの八十船と漕舟とくふつま  
く。兵士のやまとあらり船波まで運び集う人の歸りあつて  
よつて傍り。やまと夏祠にてうれど。下の人ともづけよほ人の  
吉本ぬれりうそをばよあもしりうそ。まハ私てもほん渡渉  
人のげり。むらかよ人うきまどりてくつる。まち便へ  
あつてせりちうれをもと祠をはるかずとつる。ふと今

取て源すら夏のゆくの情とよんまでもよもとす祠にて。即  
言がよその情すらしとひよと作とぞれし。祠にてもくとぞる。  
そべて寺ハ浪きく源下情とぞりて。せよ新ひよき大き熱ナガゆある  
づきたうれし。祠にてきうてもさうり大うめハひて  
うれしよあし。典理とよと琴へてほん。先種ともう情を  
采の穎アキのどく。祠にて草すらも。ひよく種の氣うてまわらま  
うれし。休ふよく其中より元の木のはまよどり。若木にて蔵  
すられ。一粒の米よりつで多くハ加まよきよ。美松すら草にて  
木すらてすらよく。多くハ加まよきよ。美松すら草にて

とぞよじて大うき情と他人をあらずとしと稽きまじふ  
と哀よひて終にかねびざき夏の功ある。とゆふがし  
萬の葉の葉をさしもなつてくらす事あつてあび  
づる時より情とあらへずも、まちむても角す自  
然すよからぬのれ。古人のすばらしきよへて、今もやう盡  
りきのう夏とかせう。極とてえうりりく自化的  
きひう向こうべきまうれり。とへきえんの情とかくても  
情とくしきまうやうう事。うきうき、自由にうきういてあら夏  
かり。さてうへつめの人の手の當者たるはうつて、ゆく  
す、ふくをうづきまう。今の人と別とそくはく

アラモトヨシテのまことほひをさうがくらとてそひ噴き  
シテモニテ文あり。アリテのくらひてまくるもとへ  
ひま。今せの半色よつき。人のつむじふねりよりもとへ  
る。もとねき度のつでそれをえとあす。今アレハ。浮く  
コトアリ。アラムのきくまのよつきてアヒカモアリ。ツバ上の  
文の意とアタマ解かぬ。アリと見え。アヒカモアリ。ツバの  
アタマは。アラムのアヒカモアリ。アヒカモアリ。時より  
氣よ感じ。情あれど。自然の事。アヒカモアリ。人と  
アヒカモアリ。情よ感じ。モバ。アヒカモアリ。阿字す。ハア。アヒ  
アヒカモアリ。アヒカモアリ。アヒカモアリ。

テハよの書の俗言トはらど。理屈と云うれて更の實情と云ふと  
云うれど。きく人さりやと云ひ。あまきと感ちつてアハ必切くて  
あみと云ふれを自ら考ふと。衰ての事と見て是とつの主  
ト。そぞありと。更にうる時その性とく洞考やふもじやく  
とんぐー。すくひてもしにドリ。自らあぐとうとすやづきす。  
アルモア洞考は。あらの先の。とくうて先実情うりて洞と發し。  
まく初の考りやふ。べらく移りまふ。年の後す今アハ増りく  
きゆる。そくぞ炮火ありて光と發し。且光氣よもて火の薙ひ  
とまさか。どく。其との理アハ古事大意よつて

人のあくやとれたれのありタクと ニヨド 朝庭きうイケテ勅使して

アホの所と云ふと。考の裏とくひうけれ。あうドレサ  
勅使をつむかへ。アラシの裏とくひうけれ。アラシ  
シテ。まく。奉一まく。おもて。終。アセ。終。アセ。終。アセ。  
アセ。アセ。終。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。  
アセ。アセ。先ひて。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。  
アセ。アセ。先ひて。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。  
アセ。アセ。先ひて。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。  
アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。アセ。

序りて三つとす。方多し。まへて人を向ひて立まとひあらさん。  
相手をもつたりと。今かへてひそてねど。さくらやあらへて自ら  
そよやうえ、そばやうんか。ゆきはきてす人の哀れ感トロ  
げがまし。世を廢せまつてよろしくおまつ。とまづひて相ひし  
とくともう。すくよそのつどにやきうるとおちぬづきうちて  
うでよすぎハキルうると。女小児の歌ひうと。さくらまづうる  
よひうち方。やくよほたゞく哀うるあるべてよんすまつて行う  
き情をかむるがれそ。さうビ女小児のよくともべきかゑうく  
ふうじ

さりうそり。おひるよりもう一月をまわすと  
さうやうす

天の月へすりきりしてひそむる三笠の山か一月と  
毛を古と東旅の郊にかろすて。またの月をつす里で  
車はくすり。吉日の三笠山のまわりか一月をすすりと  
うて。千里の夢へき悟とあせり。くづく詠へりのと  
ひて。五里の夢へき悟とあせり。くづく詠へりのと  
みよ限を候。うきりあらうととて。夢てあらうとい  
候。うきりあらう。千里の夢へきむはうべし。され  
ありて。情のあらう。ハ初の多かよ。きく。なまよあらう。ま

テの事と初のやうな事とあるべし。土佐日記  
され月の湯もさすとく。け時とてひどもとて都  
へ山の湯より月と波うちはよほしき。モト初入波  
ちかく又波の年に入り一入す夏とのこと。とくに初の事  
とくに情も二の事であつた。山の湯より月の  
金波より波の年よりぬるやく旅する所隔てうらがる  
よれかどかの年よりぬるやくハ事のゆきれどくらべてうらがる  
故の事と云ひやうとあつて。初の事と  
金波の年よりぬるやく。と風をたぢれうらがる  
也とおとつ事のやうやく。一首のナシにて意りきる初の事と

うすす。唯このとえまいづてよのじる。まゝ上手の  
事だ。またおとづれをきく辰の上と連れかへる。行きて  
方の夜のまゝ風うどが立ぬ。けりゆき陽と夕べ。  
づき使のまゝすうりで波りとりすらむねと教す。  
すか。りへるのとよまとみて。ひすのそとねのまつらす  
こそ意のこへあじべの初うて意のほとあつたやうに  
き。の月一回すておのまとひさんハキとづきくる形くせ  
そそすと詠のとあとあくし又  
かうじのくわすれうち鴨もすみ簾のうへひくねく  
毛と萬葉三とあく。またして入るのびき。歌く

ひ。事は清々すまし。夏と秋も三月で三日です。それもけすと六月十五  
日のひと御事と申します。六月十九の日。おはきだうしなけり  
事ある事。さう。アーヴィングと申す。おはきだうしなけり  
在り。アーヴィングセアリ。四つの文字あつてアーヴィングセアリ  
事。アーヴィング。十五日。清て又その衣薄。アーヴィングの朝  
モテの衣服。アーヴィング。十五日。清て又其衣服をわねはづき  
あらわす。アーヴィング。此と申す。未分櫛附添。アーヴィング  
事。アーヴィング。アーヴィング。アーヴィング。アーヴィング。  
是を古今集。アーヴィング。アーヴィング。アーヴィング。アーヴィング。  
阿多く御れ。アーヴィング。アーヴィング。アーヴィング。アーヴィング。

をへんじてからかひのすと切つておつせでさる  
が一カ一ミの四まろすちなら  
大し上手の手はまくよもぎを束ねてさすとまろ  
一々のひきぬき。怪しき御おとせにありてうすやう物  
いきをさす。まくよもぎを束ねておつせとまろす  
うり毛足とてとまのとむかかりぬけ。自然すきなほして行夏の  
よもぎあら。まくよもぎの人とよもぎあら。まくよもぎのよもぎ  
よハふのよもぎあら。おうてまくよもぎのよもぎのよもぎのよもぎ  
のよもぎ。備てまくよもぎとよもぎておさすよもぎたてを令とひよ書  
人の採色。葉うきよもぎあら。自ト時々の氣

げられてするむはきぢゆが。どうかねもひあつてつまらひと  
氣とうへどりなうが。これとよくしてく跡人と。おうす  
自然うる情のまふ立ゆぢよもんまづき半そく。今の人のご  
情と。せよ。すよ。

後撰集の如く。新の如く。ゆきく。かくく。うきく。せきく。  
も。も。も。の。ハ。案。ナ。リ。多。キ。

の手袋革革等ももたり。さて此のゆり草と待合りを云  
ふべし。嘉永十月八日のゆりハ一束で一束五十五文と。その同月  
とくに短日さう思つたのは昔々と云ふ。やうやく夏ハなれ

おも自然の情のゆうに上りと下りとよびよぶべし。千載集意三箭  
方政大臣の手に「その日とまよりまくらひのい立つてうそん  
をうりうり。うるはよむれすうれんを。實うりや有りん」と云ふてお  
ふうれいへうるて。まこと先づよつてとおちるゆう。されど実  
うりきろ情とはねぬじざくともありまうれ。土佐日記は七葉の児  
のううす。又世人のううすすと云ひておもひうみへむ  
あり家の女房のううせと云ひておもひうみへうみうみへ  
うみへ  
けす金葉集はくへすまくはくへうみうみへうみうみへ  
うみへ

あつしよひといふをもす。アホトコロのすまう  
ま、まうすとす。まくはりはるいすとす。鶴  
の長明といふ。

お世の望くらもつゝて。初ハヨトシ。ハキタスル。ひよ  
され歎きの情すらあらず。テヨテ。どのは言外の餘情す。されど。

侍あと。感して泣騒ひ。早ひ。うやせと笑り。

平康賴先君の。一。流れて。す。す。傳うのまじ  
あやしきよ。て。書め。す。

うまじけの。小ト。ウツル。あり。私。よ。まの。し。を  
風。ちかよ。行。よ。ほ。す。な。う。し。ま。そ。の。事。の。

ひ。す。朝。て。き。夏。が。こ。る。宵。ナハ。美。情。マコト。う。る。

ま。か。の。人。京。と。の。れ。ぞ。わ。く。う。と。顧。モ。瓦。火。木。の  
す。き。震。う。す。瓦。す。さ。く。う。の。ん。御。主。の。び。り。と。え。て。

かの。く。テ。よ。ヒ。テ。カ。ユ。修理。本。文。便。虚。

す。と。焼。せ。の。く。と。う。え。あ。と。り。の。か。く。と。ゆ。  
三位。中。特。よ。あ。か。と。う。ふ。せ。ん。う。る。よ。の。お。う。と。ゆ  
コ。す。で。あ。う。あ。の。り。よ。移。り。う。え。の。ね。く。よ  
き。ご。川。う。れ。名。と。う。れ。方。う。る。今。ア。ビ。の。あ。れ。も。あ  
せ。房。う。く。く。所。ア。ト。ん。苦。う。づ。く。て。え。く。と。と。ま。り  
す。し。ま。す。と。と。あ。い。ま。で。と。も。ふ。う。り。せ  
夫。婦。の。回。の。う。ひ。ま。と。大。き。の。情。ア。ミ。た。ま。の。ま。う。る。あ。る  
よ。か。り。う。れ。ば。ま。一。ト。い。あ。れ。ま。り

主上八嵩のうり言ふおもて博くちる御と。八月十五赦月。まよ清。

大國の事と御用とをうつてと。おのと育てりねん  
おがやせれて。つも志れぬと。つもかへへてワシをも  
そよと。せのぶしとさやまく。つも福津のあらがる  
ソヤラク流すと。大脚心と磨きさんと。平行座  
おもはうと。え牛の月うれと。すむ立きハ都そりう家  
の事とまうて。ふりうととさるうとて。大脚心と磨き  
すりかかねと。さすと都ゆりあく。西まほと。まほと  
きゆけきとゆきと。すばる東う時候と。君の大脚心の如く  
してあるまきと。さくと東の信と相りうて。さくまほと。まほのうしと。

きよくやむからぬ御袖のうへよ。大脚心のそなは。おのづこひくも  
うすり。幼き大脚心よりあぐれと思ひておひつても  
凡世ある人。もううべをきまつておとせむるが如く。むか  
りあれぞおよしもをぬくの情きよし。もと居の所りに色ぬき必  
一の歎も未て終ふ事と。うそと有とすて。どうしひの所  
とうとす。神代須佐男金勝さびと初。サセコはとまく。うそ  
のせりよ。おまく。うそとすと人せよ。よきし。まん人情のうそとん極み  
まじめづく。うそとすと人情。うそとのうそと。テヘ。同ド情とて。居ら  
え。故に流り人。うそばやのうそと。同ド珍きと。おまかの事とゆう  
す。感をうけ。一つもくろ。見つ。の数のねじり。ねじり。居まく。ひとこと

オとうしよすへ御てしやまある。がくはとさゆと歌うるへ候

のとくあきうれを。うらへ又キエモリテガクシハシと等シキと考

キトモあんせき人情の事すと稱へるとキアヘラビ

セム男女の事のアヒ。群ニテ情ナリでハスカムリテ。ま、  
ゾタリ俗ニテ全心も裏も表もす。うらバキナキと云ふ。自らもじゆふ  
トモルトムの事す。うらバキナキと云ふ。自らもじゆふ  
シテ。シテ。うら感がちもゆきど。おのづこキナヘ事あやまつとは  
ナシ。ナシ。が吉の事。ハセリ理アモタモマジハ。がちがち  
トモリ。トモリ。ナレバ。うらせの人のシテ。トモリ。トモリ。  
ナム更に。ナム更に。ハ行事モア。トモリ。理アモタモヒミ。ペ

トモリモ御ベキ事と云ひて。アヒテ。温モア。ナシ。情あらん  
ナシ。の處もアヒテ。候。モア。アヒテ。ナシ。うらを教ひもく  
アヒテ。ナシ。ツキの傳うそを。名伝系譜。ソク人ヒ思ふ  
福モ。ナシ。候。モア。ナシ。アヒテ。ハナシ。キ情とケユ。アヒテ。カヤ  
ツ支ハモ。ナシ。候。アヒテ。今。アヒテ。傳ひて。实の情とナシ。アヒテ。カ  
ヤ。ナシ。アヒテ。後世風俗。アヒテ。傳ひ。其の異。ナシ。アヒテ。  
アヒテ。實あらまん。御國のまこと。アヒテ。モア。アヒテ。モア。アヒテ。  
アヒテ。ナシ。アヒテ。が。アヒテ。アヒテ。モア。アヒテ。モア。アヒテ。  
アヒテ。ナシ。アヒテ。肉のまん。ナシ。モア。アヒテ。モア。アヒテ。

とのふりに舉つておもひがくとて仕りすまつての  
うへ。初よりおほくのうへ。化きる事もあれば人の事候とつて改  
かづきの候にて後なるずおのきよめりする。もとうへを今  
のへへ。初よりおほくのうへ。おもしろき事候れうへを実りし、う  
あるもいと。又まことにとたゞづけるのとあつ。び淋落も  
あ離。おこよの初にて是へも役すよみとく  
おれをキともしは。がくうきつとくとくうれ。自一とあひて夏の  
情とくうれすよもや。然もうがくよ。さびて渋くさがな  
うへ情もよつてよあんれうの事とゆきとくにゆく  
べきよのう事。うのうへもうよも。後世の理とゆりきよ

ど。詞すゝめ勢ひつゝもと強きことあり。うへ  
辟ヒガニト言うり。人常ヒトノシタニのつまんむけ。雄ヒカキハ。あく  
つやきつゝあると。あく。人ヒト詞葉ヒヤハ。わふへて情  
うけし。極きよへし。えももよ。さてちうの及ひよき  
うけし。うけし。のうへ。

元徳二年後醍醐天皇代夏中將房明々相換入高時のうへと  
て。うへとて。うへとて。うへとて。うへとて。うへとて。

うへとて。うへとて。うへとて。うへとて。うへとて。  
ありひきやり。おもひのうへとて。うへとて。うへとて。  
うへとて。谷戻ト理すよりて袖とひ。うへとて。うへとて。

まよきれりてやふ。りこつ時まよりやまより。儀式の

きよ。アラシモモトヨシヒキトロモアーニのミタヤマシモ

キモテアリヤアリ時合アソサシモアラツト。ヘヘヘ

セラ夏までアモアラシモアラツト。アヒジケモアモアラ

アモアラモアアリスン。アヒアラモアアリスン。

ルモアラモアアリスン。アヒアラモアアリスン。

説うとまくへる。うちのことをうなづいて、心をも

うすしあとをきく。彼とあくびをうなぎつきりめのま

かくもおひけに、ほのままであらわすがきつむらん。

初もま新の方よ。大は奉周胡も。かくつぶしてゆりてゆく  
よしをどの母よは事。

かくもんといひのうひのうべと、できてもつまむとゆき  
うすはまねく宿ておもどり、よしゆうへば。がて病と金  
作りくもくぞきりて、まほすのあはやう令と  
みどと。おののきくもさくは列ハ、あくれをせしもとゆき  
つづきゆくとまくしきて、りんせん夏くも。まとま情の

限りとあくアリ。見と視、病車へてまく死ひ一ち支とくふ  
ど。美の情もまかよニテクレ。神と神々ア入まひ一ちう  
う。しと人情の限りとまくどくそば。天地と神とあくレ  
ミテ、そのまくさきへまくとまのるなり。蟻通とア  
ホテ。急促<sup>ニハカ</sup>馬の死<sup>ト</sup>かひ一ちうタクマサエよまくまく  
體<sup>星雲</sup>とまくわやタとワぬたくまくらりとけ、とまくよまくまく  
是くよりて、のつちやく、更残<sup>モ</sup>すまく<sup>マ</sup>キの序よとくまく  
高城の王とおられ<sup>マウケ</sup>まき<sup>ト</sup>一ちうタクマ。國の日食<sup>マウケ</sup>まくは

あまゆばくてもゆる井の井のあまき<sup>マウケ</sup>がつ、うとゆくま  
ちくしたれあくまくテテ、とまゆく、りん<sup>マウケ</sup>。

さておれども王のむけにあげる萬葉十六  
そくす。テのまへかの限でそくても片鄙カタハタにてそくひきし  
ごく風き方カタチをうかせしとあさき山の外カタヒ  
あやてそひんやく済オヨリへひきよみとひて。アコミの  
ひとよひまをやうと王のくわらはうとまよ  
まよれよ。まもとすり変り音ノイとまよ  
まよふるゑてその体格シケイあるとまよ。一。サムラウド理  
届えて俗言カタニてば。うさぞりやまんほしてなれき  
うれづしてばれきむらゐて。視と西シへあふて

をきひ表板よ。表門とつる尼もくしてせとまし。里板とすよ。  
そと野り布丁庵とすて住むよ。一夜益々も窮ひ入て。尼む  
くろわゑ。まのうと奪もじとマト。尼<sup>カミ</sup>拂<sup>ハシメテ</sup>くよ。さうとく  
よ。ほとりと取波のあくし。とまもとまよ。よけよけよけ  
けキとさうて益々も虎とゆくよ。ふせとおアリ。とハセ  
と隨小車でモウある。よ。元ち難波のうよ。すく。芦は廻  
下敷ひのもの。うし。ぐすりと。お酒の酒て入へ。理も。い。を  
オハナれて。とせと漏つ。ゆうあき。を。感。あき。ため。る。情。く。れ  
よ。うう。うう。もと酒入。益々も。うづか。うづか。れ  
ざるよ。え。うりと。と。時。益々も。と。は。ド。す。る。今。し。ば。

で感トキテ。とて、人をもん。うの三、候は世人のよへ

微書記とく。罪ありて候後の一の事ハヤマシナリ。

まほの年の七月十九の日よりてまりとふ

アレニヨウキ祝すがち。ヨアノモのとくのゆへと  
アキヨナリ。罪赦されて石川アリ。トテアシハカセモヒ  
タキムル。オリコエ死て、人方おもたば。被すまつて  
リスモキテ、古々トキ。シテ、甲斐うきタヒビテ、若ニヤドリ。ウ  
タリ故。公トミアリ。感トキ人候。ヘ、奥山人。すみ言  
大和物語。高院の下トアリ。モモセウヒトモ

ソレタタキ。わ泉の園。アリカヒテ、びかヒツバ。ふくい  
シタ。ととのやく。かく。モイク。ひかヒツバ。ト  
テユトテ、アリ。ゆつて作。有れ。ト  
キリ。アリ。の。あ。アリ。つ。モ。作。や。モ。人。ま。と。こ。く。ね  
ト。有。アリ。と。る。人。ま。き。て。え。よ。し。べ。あ。ア。リ。と。今。朝。し。と。旅  
あ。の。あ。ア。リ。す。人。の。ア。リ。つ。と。と。後。而。び。ぎ。す。え。と。と。つ。る  
ア。リ。ア。リ。前。と。ち。て。後。テ。ア。リ。と。の。た。き。り。ア。リ。と。と。を。あ。ア。リ。  
え。モ。ア。リ。と。あ。ア。リ。人。の。ア。リ。う。ア。リ。ア。リ。ア。リ。

大和國さう男女。一月皆。うして候。まぢ。うす。ア。リ。

うんの男あくしやと率てあく。壁と床とへきりとつた。  
その女はあとと、ひだりよりまわら。わらのよねぎを  
ひりと席に寄りし。男はまの席のよねぎにすこしと  
すまひしけたりまよ。の舊の婦セトヨヒ  
ウルとさう啼てや人よひき。今もよほ声くすくさや  
とよもよりくね。あひりうきをすくわくばかり。新の婦とが  
うへまうて。どのでくよんにひりる。辛のと今男康が  
ちく。己があくとくみし。されども今もよほまのとくふ  
すて見とこすて色ども。首を彼か康のひくつかへ。つまて  
あく立タケ。時と方へは。今康のとそひもとおもてと飛き

おもひて。行はるる中へとれんす。ゆき。ゆきの  
おほきまがりひまつらうさんせうとて。ゆきの  
えくとらひすこえすしと。ゆきのゆつよ。ゆきの  
と廟へ入らずせひうるまねを今。ゆきのゆき  
とおひて卓。ゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
とゆき。あくまでもうひ。ゆきのゆきのゆきのゆき  
ア。ゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
や。ゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
ミ。ゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
ヨ。ゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

のれと。あこ陰太納言殿の御すよへれのすすりもあらう  
うのすすりもくそりもうね。まよひはくはく殿すよしをね  
。禁裡(ミカド)の御庭のねり。小式ア内侍の寺とて物をあつとこまわる。  
そし本草の寺とて風ト一まほあつと時々西子とくらす  
まの感ぞうとうそ。まほ天地のそと理とまつた。寺うかがひ宵  
をうかがひ。とせ俗の寺傳(コトワリ)。いふがりへうかがひ。あきゆ  
そばや行下參(ヤハラシ)。寺のまきうちい今まび  
この世人を心こころそよんぢよと。ぶとづくらひ寺と瘦く  
瘦く。故と理所(ヤハラシ)。道としき。夏あらじ。しやうと。うだり  
おひだり。さるはなまく。一地(イチ)。そよびての湯と瘦く。もととぞ

く。あゝハ常々強く壁へさき武士にてど。テハ初とわゞま情ゆ  
くおよやうとく説かれ。その後の今とふるもびあよ。さう  
がんばりあらんことをやめ、あく壁へさき忠すうりつひへ移る  
やうである。あゝとおもひりて、あはれとて解きをゆく。若川の水とい  
うてぬづきちかくを銷くとある。風と波とよのよがいの音一きよ  
夜のまでハやうびゆくとつひて、互はゆきうきとゆくと對ひ。人の力の  
まづきよあらじよの声はえずば。けれ、一方ハ多ひてハ済うゆくと  
せめやうとくをねぐとくゆする手の熱効とすと。さて、初にま  
たけく卑へ下るうつてつひて立ち愈よん

智者もあらず。誰ともうさうりあり。さうの男けぬふ  
かとあひうちてからひて。はすよのくわきくらぎり  
むかへまどほへす。すまきをぬして。まくらにり。どくまのく  
ト。テくちやうか。やうきれを。わゆへとてひて。りくにそ  
たのく。他つりやうくく。ひて。身のがくくうらき。行ゆく  
まひて。あ裁のキヨアレス。アスル。あゆく。おまで琴を  
ねうし。け。うかがき  
えうけを。沖津三。波たる。山根よ。やろがひもうさん  
くよも。唐よ。れど。毛とすて。それより。又あてと。重く。を。あう  
まうん。お。上句。沖津。三。波ま。ハ。まく。さん。序。して。四。ま

三。ゆふ。と今。小森中。る。ひく。り。研。へ。と。す。そ。ひ。ち。ち  
け。く。あ。う。つ。す。ひ。ま。書。す。そ。び。て。み。テ。か。の。す。ま。ち  
て。研。や。う。く。衣。う。け。う。ま。は。立。田。山。と。と。す。ま。え  
ち。ゆ。の。く。そ。ハ。福。研。と。ま。い。カ。う。き。夏。き。み。と。女。の。居。う  
て。や。う。う。ま。は。直。て。福。研。と。の。く。も。と。う。う。な。う。ぐ。み  
小。表。中。う。も。ま。の。う。う。て。旗。わ。く。ん。と。う。う。旗。あ。く。れ。  
う。う。う。う。の。ま。と。う。う。と。も。と。研。と。う。う。旗。あ。く。れ。  
そ。り。う。う。研。と。う。う。と。も。と。研。と。う。う。旗。あ。く。れ。  
そ。り。う。う。研。と。う。う。と。も。と。研。と。う。う。旗。あ。く。れ。

く氣を觸る。了りあつて手引がござつた事も  
うそぢや  
大和物語の爲人ひよ。考へる所にある今あつた事。  
つる取締の事もアリ。記述はうづく事多  
魚の油りしむじうとひきくととちをうづせ  
テ人魚うらうまのうきりうつてこなづかざる  
さうんせひりいをあそんでうきしてしまふ  
又角ド右近の口傳。もとうけのるをけて禁物と  
思はれ。後日ひきうち  
ワタリオトナシだあひく人の余の御くわうす

まへよの事へ人車へてく。ものかべへつゝと船あれ  
すと。今くへる船すとよつるんのまはせよ。す洋の  
まはせよ。が。うと後せんと貞女ウニヨミの後をよきす  
きりきとねすとハソシ浅き裏をと。とてハちをみよじと  
くまへす。御ようづやう後のす人裏ウニヨミとくみすとすす  
て。が。うりはよ。す男の金の持しとす。情と有ねま  
すす。深くねすやしてひてあき。時よりてをせの後  
人の心もよき。彼ともや考へとひ。又今うそとすと  
のうけつれひとこそ。さる。彼ともすと男の銀幕  
ひうち想へ更よすと妻の傍へ。今ちとのときハ絶句へる男

向うへとさう、なま実情とつゞく。假のからうきこす。六考みえの  
女とんとわうでよの大和の女。人の命のとくとくをあらぬと戯  
りきとつきよくもしべく。ちとくとくやあくもしぎよ。  
内ド右と桃蔭、草相もくはんきつうりうすよの君  
まうれすとあひてよくてうまうりひづるふ  
ト一ぢりへあまのひうるぬうに貢献しきをとばかくやあ  
又射怪て隠より。常々のむと毛かきそぞりりれど。ゆく  
てテモうりつやうてひやりうる  
恭候すまもアシモアリ。まほまほうめうりゆうとこう行のも  
あす。サヤうそ。おとあひて卑しき羞する。ぬく。人を危

さう。うつむけたまはうつす。自うつすくもよる様のうつり。  
 まとも今うく。おのやれおひとひくまくわせらば。人の耳もとてす  
 性とおとすれを。おのやれうそとけひひとえうす。くく  
 ひうすすみれおとすとまくし。よすすと人の性のうく移りハ意の  
 うそてすまくす。おのやれうそとけひひとえうす。意をめぐらすとひの  
 かうれす見方朋友のうそと常はぬり。おのやれおとが國人を走  
 の脇ハ済くして。おのやれ中も小情うきをまかだまくありて。せつ去  
 も戒すと。後世もまちやうづけり。詩人済くして載もうり。

明何仲默之言え。夫詩本性情之發者也。其切而易見者  
 莫如夫婦之間。是以三百篇首干雎鳩六義首干風而漢

魏作者義開君臣朋友辭必托諸夫婦以宣鬱而達情焉。  
 其旨遠矣由之觀之少陵之詩博涉世故出於夫婦者常  
 少而風人之義或缺々。余言玉勝間すむかく論じれど。  
 ねりかりて是もくまうのゆうて更りくまうハ詩經工男  
 女のうしの方多くと。毛角ひまけてしと考に朋友のをと  
 夫婦くつけてつづくと序すとおとて。孔のまくはつて考く。  
 み雅板の音の都ひソで、うるのくさん。考すと人情と考人  
 三事の向うへまくとおとと序すとおとて。孔のまくはつて考く。  
 まくとおとと考く。がくくよん酒き仍くすとおとと人情と考人  
 性情のゆうとおとと考く。アヅカアム。幾皇國のやへ事と

うとくうううう。君臣朋友。さうの事とぞす。

「ひまむかひひ、ひきびう。ひきひひうさん

君臣の間の情をもうすすめす。

古大 球波村のうとかのとくはあれとあがみをせんじゆし  
凡雅も 万引きやまきりの舟のうてをひきひてつるをわらのうと  
古大 ほのくまのうち川くえもとてあつてじもけよまで  
轟た ほれのくまくまくまんちとやちよつゆくは  
新亮 もうけとくのよのけとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
四十六 胡どよみたすめでうりてあつてづらをうふま  
轟た 故子の間の情をもうすするものゆく

萬葉一せうはうひくふ父をとおきてやまくわうれうせ  
萬葉二怪うとくとて後ともうくらうせうてれとわくたうう  
日韓 うひあうりしののうとおめいとせくがくのを教ひまき  
玉葉四 まとおりへらしてやしすかと教ひたうと迷ふせう  
萬葉五 ふねとえひともとううんと拂ひたうとまうやと  
新伎撰度 人のぢやのんとやくわゆどもとテスイ達ひくね  
三二 そくの歌ひてまくと今がくとまくて夫婦朋友のう  
一 うとくとくとくとくのまとさんとく行ふ托とくきゆう  
む。義開君臣朋友辭父諸夫婦さうす雀よく歌いの傳

後撰三

もあらむに本草を歎とすよ。四ドキヒテ  
うらひをよとわひをあまでじつわしてひふてゆ

古今二つ手でうせよのあくびん船しらばかと五ド  
さうは行ひてとくとくおとづるを人のものとしも  
ひてゑすきがの怪人の事わざをうてやあくま  
入を立候ひた候うきへ皇國の事よあくまくえふ鳥の怪と  
三才三事を立候ひた候うきへ皇國の事よあくまくえふ鳥の怪と  
キトケもスケもの怪とと半たゞ四ドキヒ  
古毛よのすよあてこくのなうりをまのひとくあ  
捨、憲あり事のあてーサーべきくく人をまきまけトケ  
意けりとあくまうひのあゆきがと人よづくうまう

古毛

吉十

於花うの思と人いゆせてワルサト花よとづくううか  
テルカトとまかしレとテアモト人と人とかくとくユアモ  
トとあくまう

古悲

玉難

つらどむ神よあくまうかへ人と人々のなうとあく  
玉難そよ老のうひのねーとは月にむかくうとあく  
うふとれひようてへがさかきゆくか半くかくも  
あくとしもかのうかくとうみくうひのうか  
ミルヒとらまうてへもとくはくもとしづきうのう  
金くもとくはくもとしづきうのうか  
あらひよまうびと罪あるべき事もとあくま

まつまつとすすりながら、あらひもり聲からうるさい  
すくよみをきくとすむて。どうも事のまゝと云ふ  
すれは、アヤカゞべきうちうしも。事は月をさうぐるや  
身もの恵とつひうひ。並もさうしておはなしをすま  
巻きこぼす。今の母の人とよぶとのつ語ひて座つて。事の  
玉座を扶とばはずつぶたとおひり脚ちぐくともあれハラヒモトを  
古無にて。まもそれぞぞしき。あよとよつてひまつてと感きがゆ  
かゑを打て。他人へとよつてしまわぬひが事多より。  
多く人馬の脚きが故う。まやまはつてと持てまつて。方  
まく人馬。それで常するまげきはやびんのまくま方

うん。もとラスト今うち後半をじん間の間で、さくらをま  
とましまさうが、さすがに度のあひびきよ。アマガ筆  
もてうまわるといふことのつわおとばやうへわきて。  
馬車のうとおりもんとが、まぶんひとくの  
駆きえとまうなめ。猪市守のまへ下巻とされあもし

歌乃大意上巻畢

